

## 大阪・関西万博計画具体化検討 WG 用資料

大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を、多様な環境のもとで生きる世界中の人々が真に実感を持って受け止められる、意義あるものとするために……

## 「いのちの万博」と愛称される万博をめざして



世界が共有できる現状認識として「いのちが危機にさらされている時代」を出発点に

「いのち」への危機はさまざま——

(直接的な危機) 核戦争の不安/テロ/環境問題/気候変動/自然災害/飢餓/伝染病……

(主に先進国が直面する社会問題) 少子高齢化/過疎……

(人類への恩恵とも危機ともなりうる先端的課題) 生命科学/人工知能の発達……

(人の「生き方」に重大な影響を与える危機) 少数民族問題/伝統文化の衰退……

参加各国はそれぞれの置かれた状況に基づいて、

- ・ どのような危機が最も切実なのか？ その実態は？
- ・ どんな知恵（伝統的な、または新しい）でその危機に立ち向かってきたのか？
- ・ いま、それぞれの国で人々はどんな生活を送り、文化を生み出している（＝「いのち」を謳歌している）のか？
- ・ 今後、危機を乗り越えて「いのち」をもっと輝かせるために、どんな技術や社会の仕組みがあれば有効だろうか？ すでに行われている工夫は？

を提示し、会場でもともに考えるための展示/催事を。

### ◎世界史的意義

第二次世界大戦後、「東西文化の融合」が国際平和の課題であり、とりわけ1960年代の植民地独立ラッシュによる国際社会の構造変化を受けた1970年の時点では、日本がアジア初の万博主催国となること自体に世界史的な価値があった。

それから半世紀を経て、2025年万博の開催権を得た日本が世界に向けて示すことができるのは、さまざまな立場（先進国の立場、かつての発展途上国としての歴史的経験、アジアないし非西洋の一国としての文化的立ち位置……）を知るからこそその包容力、つまり……

「文化多様性」時代の真のリーダーシップ ではないだろうか。

……「いのちの万博」という「未来社会の実験場」を通じて、日本が世界に存在感を示し、また自らを鍛える目標としてもふさわしい役割。

## 万博史に画期をなす「熟議型」万博を

### ◎万博における主要な展示形態

実物の陳列（1850年代～） → 写真パネル/壁画の掲出（1930年代～） → 動画上映を中心に決められた動線上を誘導（1970年代～）

⇒ いま、人間どうしのコミュニケーションこそが新鮮なのでは？

- 各参加国はアトラクションの一部として、それぞれが捉える「いのち」の問題についてトピックを掲げ、観客を呼び入れて直接議論する場を設けることとしてはどうか。
  - ・ いわゆるナショナル・デーなどのイベントとして1回限り行ってもよく、連日小さなミーティングを行うのもよい（それだけをやり続けてもよい）。
  - ・ トピックの立て方（「いのち」の問題の捉え方）はもちろんのこと、議論の場の設け方も、国ごとに異なるのがよい。……TEDのようなパフォーマンス性の高い催しを行うのもよし、パビリオン内で車座になって話すのもよし。それ自体を各国の出品の主要な一部とみなす。
  - ・ タイムテーブルをつくり、来場者が関心に応じて多様な国の議論に参加できるようにする（議論のハシゴもよい）。
- 日本は自国パビリオンでの企画とは別に、開催国主催事業として会期中継続的に「熟議」イベントを行う。
- 企業等、国以外の参加主体にも、それぞれ自由な形でこれに沿った企画を提案してもらう。
- 「熟議企画」による参加募集枠を設けてはどうか（とくにNPOや学生団体など）。

※議論の言語については、（そのときまでに大きく進歩するであろう）自動翻訳の技術を最大限活用。必要に応じて通訳を雇用。

※各国パビリオンで議論の進行を補助する人材（学生アルバイト、ボランティア等）のトレーニングの場としても有効に展開可能。



- ・ 会場中の各所で、人々がさまざまな規模で寄り集まり、ワイワイと楽しみながら議論する風景が繰り広げられる、新しい万博。
- ・ 主催者側で用意する通信システムによって、その議論を地球上のさまざまな地点とつなぎ、夢洲を中心に世界中で話し合う万博。……19世紀、世界を一つ屋根の下に収める箱庭として始まった万博は、21世紀、世界をそのままにつなぐ大交流の拠点に。

さらに、

- ・ 車座談義の場が会場の外にもあふれ出し、大阪・関西、日本の各所で「いのち」をめぐる熟議が展開される万博に（万博準備期間～会期中～終了後）。